

金谷園きんこくえん
(杜牧とほく)

繁華はんかの 事こと 散さんじて 香塵こうじんを 逐おう

流水りゅうすい 無情むじょう 草くさ 自おのずから 春はるなり

日暮にちぼ 東風とうふう 啼鳥ていちようを 怨うらむ

落花らっか 猶なお 似にたり 墜樓ついろうの 人ひと

繁華事散逐香塵 流水無情草白春
日暮東風怨啼鳥 落花猶似墜樓人

解説 晩春の夕暮、いにしえの金谷園のあとに立ち、懐古の情に沈んで作った詩。

語釈 ※金谷園 河南省洛陽県の西北にあるで肖の石崇の別荘。 ※香塵 香りのよい塵。 ※怨啼鳥 啼鳥を怨む、と読むが、意味は「鳥の啼く声が怨みぶかい」ということである。 ※墜樓人 石崇の愛人緑珠のこと。

通釈 昔、金谷園でくりひろげられ豪華な遊びは、香ぐわしい塵が、あとかたなく消えるのを追って散じ、今はしのぶよすがもない。流れる水は、人事の興亡をよそに無情にせせらぎ、草は春の装いをこらして生い茂るばかり。日の暮れがたにたたずめば、春風に吹かれて鳥の啼く声も怨みぶか聞こえてくる。おりしも、目の前を花びらがパラパラと落ちてゆく、そのさまは、かつてここで楼から袂をひるがえして落ちていったあの緑珠に似ているようだ。